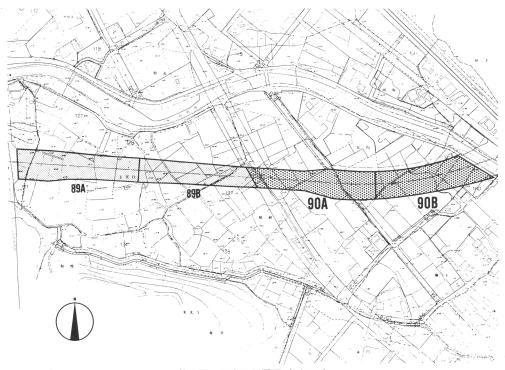
# 東光寺遺跡

## 調査の経過

東光寺遺跡は、額田郡幸田町大字深溝字上天白、字天白及び字城跡にかけて所在する。 遺跡は、県道蒲郡碧南線と同安城蒲郡線の建設に関連して行われた圃場整備に先立つ幸田 町教育委員会の試掘調査によって確認され、耕地整理部分に関しては6次にわたる発掘調 査が行われている。県道蒲郡碧南線については、愛知県土木部からの愛知県教育委員会を 通じた受託事業として、当埋蔵文化財センターが先年度より調査を実施している。平成元 年度は、安城蒲郡線との交差点より西側部分の5000㎡を調査し、今年度はその東側部分5000㎡ を90 A、90 B の 2 地区に分けて調査を行った(第1図)。

遺跡は、美濃・三河山地の東の遠峰山と西の三ケ根山の山塊の山峡部を流れる拾石川右岸の洪積台地の中位段丘面に位置する。標高は、24~32mを測る。遺跡は、南と西は三ケ根山の山塊によって、東と北は拾石川によって画され、西の拾石川に向かって緩やかに傾斜する地形上に立地する。周囲は、近年まで不規則な土地割りの畑地と果樹園であったが、圃場整備によって整然と区画された畑地となっている。 (酒井俊彦)



第 | 図 調査区位置図 (1/4000)

## 調査の概要

先年度を含めた調査区全体は、三ケ根山の山塊と拾石川に挟まれた段丘の中央部に幅20~30m、長さ約500mのほぼ東西方向に伸びた形をしている(第1図)。89 A 区の西側は山塊であり、その麓の89 A 区から東端の90 B 区の西半までが洪積台地である。90 B 区の東半は拾石川の河谷で、東に傾斜している。遺跡の基本層序は、洪積台地上では 1. 灰褐色土(現表土)、2. 褐色土、3. 暗褐色土で、深さ0.6~1 mで基盤の黄褐色砂礫土層にいたる。2・3 層は、90 A 区を中心とした部分で「黒ボク」と呼ばれる東三河の中位段丘上に分布する黒色土に変化する。90 B 区の河谷部分は、拾石川に向かって傾斜を始めるやや離れた地区で現耕作土下に2~3 層、川に接した部分で同じく1 層の旧耕土が礫層直上にあ

り、現地表より 1~2.5mで礫層に達する。遺構の検出は、基盤の黄褐色砂礫土及び礫層の上面で行った。先年度の調査で検出された遺構・遺物は、I期:縄文時代晩期 II期:弥生時代後期 III期:奈良時代 IV期:中世に大別された。以下、各調査区ごとにその概要について述べる。

#### 90 A 区

89 B区の東側に連続する部分である。溝 6

二百数十基を検出した。 6条の溝の内SD03~ SD06は、弥生時代後期 に属す。調査区の東端に 近いSD03・04は並行し て走り、北半はほぼ南北 方向、南半はやや南東一 北西に方向を変え、調査 区を横断する形で検出 された。その西側のSD 06はほぼ南北に走り、調 査区内では北半のみ存

在し、調査区中央で途絶

条、竪穴住居1棟、土坑



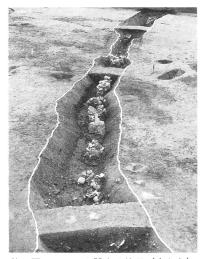
第2図 90A区全景(西から)



第3図 SD03~06 (南から)

### 愛知県埋蔵文化財センター 年報 1991.3

する。SD05は、北部がSD06と重複し、これに切られている。南半は、北西-南東に方向を変える。溝の規模は、各々地点によって差があるが、最大のSD06で幅2.0m深さ0.7m程である。出土遺物については、各溝から西三河の後期前半の寄道式土器が出土しているが、SD03は相対的に少なく、他の3条の溝は完形に近いものを含む各器種の多量の土器が検出された。また、同時期の四本柱穴で隅丸方形の竪穴住居を1棟検出したが、検出面における掘り込みは浅く、出土遺物は少量であった。規模は、長軸5.5m×短軸4.8mである。その他に弥生時代の土坑と認定されるもの数基が検出されたが、遺物は少量であった。



第4図 SD04土器出土状況(南から)

土坑については二百基以上が検出されたが、弥生時代のものと中世前半の掘立柱建物の柱穴と考えられる数基以外は時期を認定できなかった。特殊なものとしては、掘り下げた基盤の土砂が一方向に近接して積み上げたまま放置されたため、基盤土が一定方向に片寄って埋積する独特な埋土の近世以前の大形土坑(長径3.7m、深さ0.7m)がある。その他、SD01は時期不明、SD02は近世の溝である。 (酒井俊彦)

## 90B区

弥生時代、古墳時代、平安時代、江戸時代の四時期に及ぶ遺構・遺物を検出した。以下、 時期ごとに概要を述べていく。

**弥生時代** 竪穴住居 1 棟 (SB06) を検出した。規模は、他の住居跡との重複関係にあり 明確にしがたいが、一辺が 4 m前後の隅丸方形と思われる。主軸は北東に振れ、周溝・柱

穴等は不明瞭で確認しえなかった。この住居 跡の床面直上からは、壺・高杯等の弥生時代 (高蔵期)の遺物が一括出土した。

古墳時代 竪穴住居 2 棟 (SB05、08)を検出した。規模はともに一辺 5 m程度であり、主軸は SB05が北東に、SB08が北西に振れる。周溝・柱穴等は不明瞭で確認しえなかった。 SB05の北東隅において焼土塊を検出し、須恵器の甕と土師器の高杯が出土した。ともに古墳時代後期に比定される。



第5図 90B区全景(西から)

## 愛知県埋蔵文化財センター 年報 1991.3

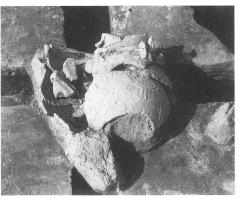
平安時代 竪穴住居 2 棟 (SB04、07) を検出した。SB04は北西隅を一部確認したのみで規模等は不明である。SB07は一辺が 4 m 前後の隅丸方形で、主軸は北西に振れる。この住居跡の床面から灰釉陶器(皿)、土師器(甕)等の遺物とともに40~50cm大の柱状の自然石群が検出されたが、その性格は検討を要する。江戸時代 溝十数条、掘立柱建物 2 棟を検出した。溝の多くはほば東西方向に走り、最も北側に位置する溝(SD07)の北壁には石垣状の遺構がみられた。出土遺物から、これらの溝群の時期は江戸時代中期と考えられる。

上記の遺構・遺物以外に、多数の土坑と調査区東部において自然流路を確認した。また縄文時代中期の深鉢が出土したが、それに関連すると思われる遺構は検出しえなかった。

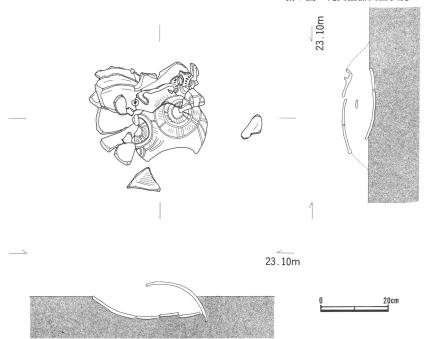
(大橋正明、川井啓介)



第6図 竪穴住居跡(西から)



第7図 縄文土器出土状況

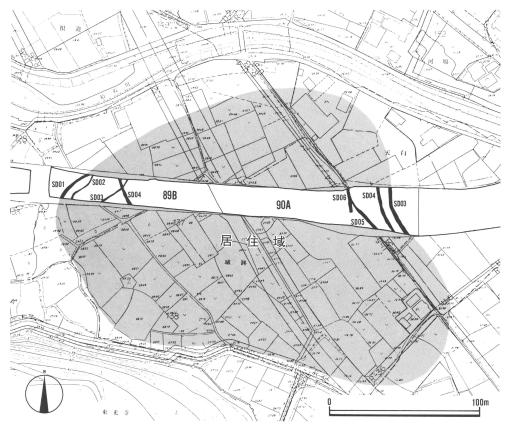


- 55 -

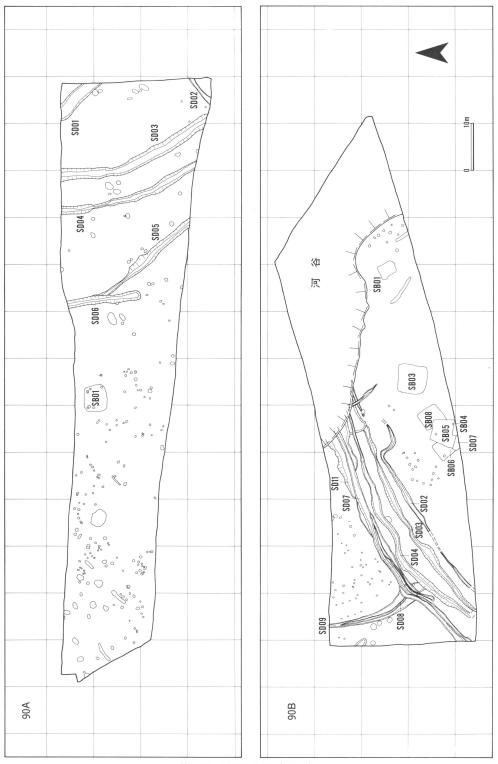
第8図 縄文土器出土状態図

#### まとめ

今年度の調査では、縄文時代から近世までの時期の遺構・遺物が検出されたが、先年度の調査結果と合わせて重要な遺構として弥生時代後期の溝及び竪穴住居がある。89 B 区では、同時期の遺構として溝4条(S D 01~04)と若干の土坑が検出されている(第9 図)。溝からは、後期前半から後半の土器が部分的に多量に出土しており、規模・断面の形状及び本数から90 A 区の溝と対応する。また、二つの溝群の間に同時期の竪穴住居が存在することから、これらは環濠集落を構成するものと考えられる。両溝群は、最も外郭をなし並行して走る89 B 区 S D 01・02と90 A 区 S D 03・04、この内側でこれにほぼ並行する89 B 区 S D 03と90 A 区 S D 05、89 B 区の他の3本と異なる方向のS D 04と90 A 区の調査区内において途絶するS D 06が、各々対応関係にあると推定される。90 A 区 S D 03・04(89 B 区 S D 01・02)は、同時に掘削・機能していたと考えられるが、溝全体の新旧関係は今後の検討課題である。環濠集落の居住域は、最大で東西約250mであるが、調査ではこれに対応する墓域は認められず、北の拾石川の対岸あるいは居住域の南東方向の区域に存在する可能性がある。



第9回 弥生後期居住域推定図



第10図 遺構全体図 (1/800)